

母のトモは小川高等女学校に行き、さらに東京・神田の村田簿記学校を卒業しました。それほど豊かな家庭ではなかったはずなのに高校を卒業し、専門学校まで行ったのですから、優秀だったのだと思います。その後、代用教員として小学校の先生になりました。

父の莊輔は日中戦争と太平洋戦争に8年間くらい出征していましたので、私が生まれてしばらくは不在でした。戻ってからは、母と八百幸商店を切り盛りしました。仕事一筋で、店では率先して魚をさばくなど、先頭に立って働いています。ユーモアもあってお客様からも人気でした。背も高く、ハンサムだったと思います。母も父はいい男だと思っていたはずですよ。

両親が結婚したきっかけは、きっと祖父の清三だったと思います。母の実家は母子家庭で、母方の祖母は女手1つで5人の子供を育

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

てた苦労人だったようです。実家は古物商をしていて、母も古物を集めるのを手伝っていたそうです。得意先の八百幸商店にも行ったことがあり、そこでよく働いていたので父の相手に、となったのでしょうか。

戦後間もない頃、祖父や両親が交代で東京の神田や築地の市場に行って、商品を仕入れていました。すると飛ぶように売れてしまふ。店は順調に大きくなっ

負けず嫌い 気概も人一倍 商売が生きがいの母

ていったようです。当初15坪くらい（約50平方メートル）の物がもちろん、進物がよく店が何度も拡張されました。

店では小川町駅前通りを突き当たった大通りの商店街の一角にありました。90店以上が軒を連ねており、毎月1日と6日には市が立つなど、にぎやかでした。八



ヤオコーの前身、八百幸商店は埼玉県の小川地方で一番の食料品商店だった（中央が本人）

話は少しありますが、ヤオコーは埼玉県川越市に美術館を持っていて、画家の三栖右嗣さんの作品を收藏しています。この三栖さんとの縁も、隣の玉川村（現ときがわ町）の村長さんのおかげです。

店が繁盛していき、そのうち店頭でお客様と接する母が、実質的な店主として切り盛りしていきます。きっと母は、祖父や父と一緒に仕事をすするうちに商売の醍醐味を味わったのだと思います。そして店をもっと大きくしたい、商売を広げたいと考え始めます。やるからには負けたくないという気概も人一倍でした。

母にはこんな思い出もありません。店がセルフサービスのスーパリーになってから、年末のお歳暮用の新巻鮭は自ら仕入れて一本一本値段を付けて、つるして売っていました。それだけは母がやることになっていました。新巻鮭を売るお客様は顔見知りのお得意さんばかり。「もっとまけてくれ」と言う声に母が応じて、丁々発止のやりとりをしていました。その時の母の生き生きとした表情は今でも忘れられません。仕入れた商品が売れるのと、お客様が喜んでくれるのと、そこから最終的な利益が生じるのが、どれも楽しかったのだと思います。母にとっては商売が生きがいなのだ、と感じていました。

日経MJ 2019年4月17日掲載